

6 年 2 組

「第 123 回 谷浜鍛錬会」 ～引き継がれる伝統～



「心の矢印」

第123回谷浜鍛錬会が無事に修了しました。計算すると、学校での泳ぎこみを含め、約310時間子どもたちは泳いでいたことになります。・・・すごいことです!寒い日も、暑い日も、疲れて気分がのらない日も、自分の気持ちと向き合い、仲間と支え合って乗り越えた経験は、将来子どもたちを支えてくれる宝物になると思います。

7月13日に、朝陽支所で行われた「地域と学校との連携懇談会」に参加しました。そこで、谷浜鍛錬会のことを話しました。すると、会が終わったあとに、「わたしも行ったよ」と、2名の方からお話をいただきました。その方々は、「懐かしい。今も続いているのですね。昔は、海水で口の中がしょっぱいから、浜辺で甘い葛湯をもらってね」と笑顔で思い出を語ってくださいました。谷浜鍛錬会が大人になってもずっと心に残っている大切な思い出なのだなあと強く感じました。

「プールでも海でも、やることは同じだ。自分に負けないでやりきってやる」「もっと周りを感じたい。波を感じて、前の人を感じて、泳ぎを合わせる」など、自分『が』『海に合わせる』『友に合わせる』ことをしてきた子どもたち。誰かのせいにすることや、何かのせいにするのは簡単です。しかし、「心の矢印」を自分に向けて、波（課題）を乗り越えようと前進していこうとする子どもたちの姿に、谷浜鍛錬会を行う価値があるのだとわたしは感じました。そして、この経験がこれからの生活にどのようにつながっていくのか子どもたちの姿から見つめ、価値づけていきたいと思いました。

伝統がこれからも続いていくことを願っています。



今日はついに最終日。3日あった日もあつという間に終わってしまった。最終日の今日はついに25分間泳だ。今までやったことをここで出し切って、悔いのない谷浜にしたいと思っていた。

まず水慣れの時間。「海は常に表情が変わる」というように、昨日とは違う海が楽しめた。雨の降り具合、晴れ間の時間、波の高さ、透明度、様々なものが違い、まるで、昨日とはちがう海のようにも見えた。しかし、海は変わらない。波、深さ、場所は変わらないから、昨日の経験を生かすことができる。そして、これだけは変わらない。「とても楽しい」。海なし県だから海に入る機会はありません。だからこそ、少ないチャンスを逃さないで「楽しむ」ことが大切だと思う。

次に、5分の泳ぎ込みの時間。ぼくはこの時間が25分への大事なものだと思う。なぜなら、25分前の最後の泳ぎ込みであり、今日最初の泳ぎ込みだからだ。体を慣らし、体を起こすことによって安全に入ることができ、25分間もできるようになると思った。そして、最後の25分間泳。みんなで協力し合い、お互いを助け合う最後の泳ぎこみだ。25分間はとても苦しいと思った。途中で足がつきそうになった。でも、がんばって立たなかった。しかも、時間が経つにつれて、徐々に「楽しい」と感じるようになってきた。そして、25分が終わったときには、もう、「25分でもそんなに変わらないな」と思っていた。でも、これは小さな一歩だと思う。海に入ったときは、「25分も本当に海の中で泳げるのかな」と心配になったときもあった。でも、今は、「楽しかった25分」となっていた。

25分が終わったときに、ぼくはとてもうれしかった。もう、後悔はない。もう、未練はない。もう、やり残しはない。この25分でまだ終わっていないのに、やり切れた感じがした。一生に一度の行事が終わって、ぼくはとても清々しかった。こうして、谷浜鍛錬会は終わっていく。一度しかない谷浜をぼくは楽しめた。そして、ぼくたちは次の世代の5年生にバトンを渡す番。小学校生活もあと8ヶ月とちょっと。残りわずかしかないうちを大切にしたい。

谷浜鍛錬会の思い出は、海で泳げたことだ。初日は避難訓練の時にはすでに大雨でできる雰囲気ではなかった。次の日の午前、できるかできないか微妙なところだった。そして午後、晴れ間が見えてきて、ついにできた。ぼくはとてもうれしかったし、思い出に残った。次に、がんばったことは、プール(学校)での練習だ。学校での練習があつて、海でも泳げたとぼくは思う。そして、練習があつたからこそ、練習がむくわれたという気持ちにもなれるし、達成感も倍増した。また、だからこそ、自分が一歩成長したと思う。自分にとっての谷浜は、「努力」だと思う。「努力」することによって、何かが必ずできるようになるし、自分のがんばりをかえりみることで、未来への宝物になると思う。そして、これからの人生にとっても大きなものになると思う。今回の谷浜は、一度しかない大切な体験だ。このことを生かして、これからの一歩を歩み出しはじめる事ができればいい。

(Aさんの「谷浜ノート」より)

